

不登校児童生徒への対応事例2（中学校第1学年男子） ～学校・家庭・関係機関が一体となった行動連携～

問題の把握

当該生徒は、小学校入学時から人間関係づくりを苦手としており、友達との良好な関わりが見られなかった。また、家庭において保護者が基本的な生活習慣等を適切に指導することができないなどの理由から、小学校中学年頃から生活が乱れ学校を欠席するようになり、第6学年から断続的に欠席するようになった。

対応状況

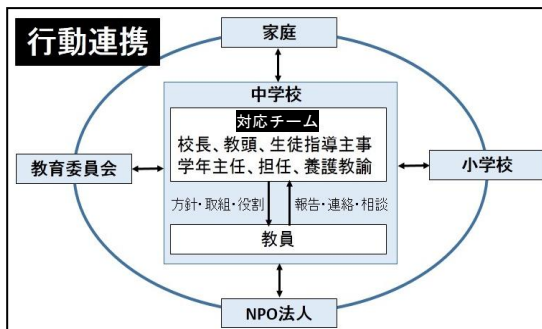
【3月】

学校の取組のキーワード

- ・小学校からの情報の収集
- ・全教員による共通な支援の確立（対応チームの発足）

【基礎的情報の収集】

- 中学校は、当該生徒が小学校在籍時から、小・中学校連携交流において小学校と情報を共有していた。また、新年度の対応を検討するため、中学校入学時の引継ぎの際に、当該生徒の性格や特徴的な行動、家庭環境などについて情報収集した。



【対応チームの発足】

- 校長を中心に対応チームを発足するとともに、小学校から収集した情報を基に対応の方針及び具体的な取組を検討した。また、職員会議において当該生徒の情報を全職員で共有し、対応チームの対応方針を確認した。

【1学期】

学校の取組のキーワード

- ・教員の継続的な支援
- ・保護者との連携

【学年団による継続的な関わり及び支援】

- 当該生徒は、入学式に登校した後、欠席が増え、4月中旬には不登校となった。原因として怠学傾向がうかがえたことから、学校は対応方針に基づき、①当該生徒との信頼関係の構築、②生活リズムの確立、③家庭における学習の習慣化を目的として、毎朝、家庭訪問を実施し、当該生徒への声かけや会話、週に1度、家庭訪問における2時間程度の学習に努めた。

【保護者との連携】

- 当該生徒がいつでも登校できるよう、学校は対応方針に基づき、保護者に、①生活リズムの確立、②家庭の役割の発揮、③当該生徒の話の傾聴、④学校との情報共有を依頼するとともに支援した。

【2学期】

学校の取組のキーワード

- ・関係機関との連携を図った支援

【関係機関との連携】

- 当該生徒は様々な教員と関わりをもつようになったが、登校するまでには至らないため、学校は対応方針に基づき、教育委員会を通じてフリースクールの機能をもつ地域のNPO法人と連携を図り、保護者に当該生徒の通所を促した。当初、当該生徒は通所に難色を示したが、担任と施設職員が情報を共有し共に家庭訪問をすることで、施設職員との信頼関係が構築され、週に2回程度通所できるようになった。

【3学期】

学校の取組のキーワード

- ・連携の強化

【今後の取組】

- 当該生徒は、理科や社会などの学習に関心が高く、担当教員との関係も良好であることから、今後、家庭や関係機関と一層の連携を図りながら、教科担任がNPO法人に出向いて理科、社会の授業を行ったり、施設職員同行の下、放課後の登校を促したりすることなどを検討している。

〈当該生徒の現在の状況〉

当該生徒のNPO法人へ通所する日数が週2日から4日に増え、月曜日は家庭訪問をする学校の教員と、火曜日から金曜日はNPO法人でスタッフと学習や遊びを通して、人との関わりを深められるようになってきている。

不登校の問題を速やかに解消するためのポイント

- ・不登校生徒に対する校内体制を確立すること。（情報連携の強化）
- ・共通の方針を設定し、学校・家庭・外部関係機関が連携し、取組の評価・改善を図りながら継続的な支援を行うこと。（行動連携による継続的な支援）